

令和 8 年度 第 2 回太宰府市地域福祉推進委員会 議事録(要約)

○日時 令和 8 年 8 月 20 日(木)18 時 30 分～19 時 48 分

○場所 市役所 3階庁議室

○出席者

太宰府市地域福祉推進委員会委員(出席 10 名、欠席 1 名)

太宰府市(健康福祉部長、健康福祉部理事、福祉課長、福祉政策係長、福祉政策係担当)

○傍聴者 1 名

○協議事項

議題(1) アンケート調査結果報告書について

議題(2) 第5次太宰府市地域福祉計画(骨子案)について

○内容

■開会

■資料確認

■議事「太宰府市地域福祉推進委員会規則」第 6 条に基づき、議事進行を会長が行う。

議題(1) アンケート調査結果報告書について

※資料 太宰府市の地域福祉に関するアンケート調査結果報告書

説明

事務局)

令和7年度に実施したアンケート調査結果について、主な内容を抜粋し報告。

質疑

A委員)

問 26 について、引きこもりの相談窓口の認知度が低くなっているが、実際にどこに設置しているのか自分も知らないので教えていただきたい。

事務局)

市役所内の生活支援課をひきこもりの相談窓口としている。

A委員)

引きこもりの相談については、市役所にたずねれば、そこに繋いでもらえるということか。

事務局)

そうである。定期的に家族が対象の相談会も実施しているところ。

A委員)

問 10 について、孤独・孤立の有無に関して世代別の結果がわかれば、教えていただきたい。

事務局)

「18 歳から 39 歳」は、よく感じているが 5.5%、たまに感じるが 22.7%、感じないが 71.8%。「40 歳から 64 歳」は、よく感じているが 3.0%、たまに感じるが 19.5%、感じないが 74.7%。「65 歳以上」は、よく感じているが 2.1%、たまに感じるが 13.2%、感じないが 76.1%となっている。

A委員)

では、若い世代が孤独孤立を抱えているということか。

事務局)

そうである。

A委員)

ちなみに、全ての設問で同様に年齢別集計をしているのか。

事務局)

そうである。

A委員)

すごく興味深い。若い世代の孤立感の原因が何であるかなど、クロス集計などで見てみたいと感じた。

B委員)

若い人の孤独・孤立の捉え方がどのようなものかが気になるところ。自分は一人でも良いと考えているのか、それとも本当に周囲から孤立しているのか、どっちなのか。個人の受け取り方次第なところもあるか。

A委員)

その通り。設問の問い方として、孤独・孤立が並列されているが、孤立は関係が切れている、孤独は自ら選択して一人でいると捉えることもできるので。どちらで選択したかは気になる。

C委員)

年齢が高い人ほど、きょうだいが多かったり、親戚づきあいが親密であったりするなど濃密な人間関係を築ける機会があったと思うが、若い世代は兄弟が少なかったり、親戚付き合いも減っているのではないか。塾や部活動などで学校以外で友達との付き合いがなかなか深まらないこともあり、孤独感や孤立感を感じやすいのかなと思う。

A委員)

年齢的にも社会との接点も少ない年代であるので、そういったこともあるのかもしれないと感じる。

B 委員)

地域というより社会と接続する年代でもある。

D 委員)

コミュニケーションをとるのが苦手というのもあるか。

A 委員)

少し飛躍するが、若い世代の自殺が増えているのも、孤独・孤立が原因だろうと思うので、そういった人への施策を検討していかなければいけないだろう。社会的な関係の希薄化や核家族化の影響で少ない人数のつながりの中での生活であるので。

C 委員)

回答者の年齢をみると、前回調査から若い世代の回答が少なかったり、家族の中で 65 歳以上の人がいる割合が増えていたり、居住年数も長い人が増えていたり、回答結果が高齢の方によったものとなっていないか留意する必要がある。

A 委員)

対象者は 18 歳以上だとされているが、対象者抽出は無作為であるか。

事務局)

配布に関しては、年齢のバランスがとれるようにしている。

E 委員)

地域での生活についてのところで、自治会の立場として反省すべき点があると感じた。コミュニケーションをとれるような事業をしたいところであるが、PR 不足等もあると思うが参加率が少ない。ただし、大人気のイベントになると人が集まる。そういった機会に参加している方と色々話すが、役員の話になると話がしぼむ。また、転入された人に加入のお願いに行くと、役回り等の負担が多いと認識されていて、そういった認識が新しく入ってくる人に伝わる負の連鎖のようなものがある。自治会としても、こういった強制的なものはないと周知しているが、伝わらない。子ども会でも同様な状況だと思う。回覧板の中でも、役割を持たなくても自由に参加できることを周知しているので、アンケートの結果と地域としての認識に乖離があるように感じる。この点は個人としても反省しながら報告書を見たところである。

F 委員)

そういった地縁組織はどんどん衰退している。餅つき大会などは、共同募金のお金を使って実施しているが、要はそういった地域の繋がりを作っていって欲しいという立場でやっているわけで、地域でできる福祉は地域でお願いしたいという意図が、なかなか実際には伝わりづらいなと感じた。

B委員)

うちの近所の自治会も子ども会自体がもうないが、保護者会や子ども会がなくても自治会で見守る体制をとっているところもある。親が仕事等で出られない、役も担えないから、地域でそこは担おうとしている。

事務局)

地域から見た場合と、住民から見た場合の立場での違いあると感じるところ。そういったところをどう計画にいかすかだと思う。

議題(2)第5次太宰府市地域福祉計画(骨子案)について

※資料 太宰府市第5次地域福祉計画(案)

説明

事務局)

第5次太宰府市地域福祉計画(骨子案)について、資料に基づき説明。

質疑

D委員)

計画における引きこもりへの対応に関連して、いわゆる 8050 問題のように、高齢の親が 50 代の引きこもり状態にある子どもを抱えているといった相談はあるのか。

事務局)

実際に高齢の親が 50 歳前後の引きこもりの子どもを抱える相談は寄せられている。

D委員)

その相談によって、外に出られるようになるなど、良い方向に向かっているのか。

事務局)

個別に対応しており、解決が難しいものもあるが、そのような課題を抱えている世帯が増えていることは間違いない。家庭の状況に応じて、直接家庭を訪問するアウトリーチ支援などで対応している。

D委員)

それは市で実施しているのか。社会福祉協議会との連携はどうか。

事務局)

基本的には市が窓口となっている。社会福祉協議会とも連携しており、社協の「ほのぼのサービス」での活動から得られた情報を共有したり、市で対応が難しい場合などは、社協のサービスで対応をお願いしている。

F委員)

福祉関係の計画が縦割りで多く、市民には全体像がわかりにくい。この地域福祉計画が強調すべきなのは、高齢や障がい、子育てなど、分野の狭間に落ちる複合課題や制度の狭間にどう対応するかだと思う。最終的には総合的な相談窓口につながることを期待する。

C委員)

精神障害者手帳所持者数について、20 歳から 64 歳までの現役世代の所持者数が大幅に増加している。孤独・孤立などの複合的な問題も含め、そういった人を地域社会でどう支えていくかが大きな課題になると感じる。ひとくくりで精神障がいといっても、その詳細は様々だと思う。引きこもりの要因として精神障がいもあると思う。

G委員)

かなりの増加だと感じる。

事務局)

全国的にも精神障がいは急増している。コロナ禍の影響かとも思ったが、その後もその傾向は続いている。市としては、保健センターにてこころの相談窓口を設けているが、こうした 1 人で抱え込まずに相談できる先を行政・地域ともに増やしていくことが重要だと感じている。

C委員)

当事者もそうだが、それを支える家族支援も大事だ。

D委員)

精神障がいが原因で犯罪を犯してしまう人もいるかもしれない。

B委員)

相談窓口に自ら行けない人にどうアプローチするかが重要である。最近、草が生い茂って空き家かと思った家で窓が開いているのに気づき、自治会長に連絡してアプローチしてもらったことで、敷地が整えられ、事態の悪化を防げた事例があった。こうした地域の小さな気づきからアプローチにつなげる発信が重要だと感じる。

G委員)

地域で誰でも気軽に立ち寄れる「フランクに寄れる居場所」を作ろうとしているが、フランクにというときの最初の一步が非常に難しい。多重課題により孤立している世帯も多く、民生委員の話を聞くとアプローチしようにも個人情報やプライバシーへの干渉を拒む壁にぶつかること。自治会活動の簡素化が進むと、かえって本当に支援が必要な人が地域の枠組みから見えなくなってしまう懸念もある。

E委員)

自治会で子ども向けの行事やサロンを企画しても、参加者の固定化があり、チラシでの周知をしても変わ

らない。個別にアプローチした際には、親から子どもの障がい周囲に知られたくないことが理由だと感じたことがある。差別や偏見を恐れる心理的な壁の厚さを突きつけられた。役員として活動がんばっているが、そうしたことから本当に来てほしい人の参加が少ないのが現状であり、地域の中での大きな課題だと思う。

C委員)

イベントなど気軽な軽い繋がりには参加しやすいが、運営する側になったり、役員になったり、少しでも負荷が発生しそうになると住民は避けてしまう傾向があるのではないかと感じる。気軽なものから広げていくなど、地域に包摂していくための仕組みづくりが必要だが難しさも感じる。

A委員)

子ども食堂の活動を全国でサポートしている団体の代表の湯浅誠氏の言っている「SNS 以上しがらみ未満」の関係を求める現代の意識に合わせ、段階的な繋がりグラデーションを作る仕組みが必要だろう。市の教育委員会が実施しているメタバース不登校支援の「とびゆめキャンパス」では仮想空間の中に学校を設ける取り組みであるが、実際にそこからリアルな学校へ復帰する成功事例も出ており、地域社会においてもライトをきっかけにしていくことが良いのかなと思う。

H委員)

地域社会の基盤である自治会システムそのものが、役員のなり手不足により、近いうちに崩壊するのではないかと強く心配している。昔の PTA や育成会のような強制的な繋がりがあるのが今の高齢層を支えているが、現在は水城小学校では PTA が会員制になっている。また、定年退職した元気な人も地域活動に戻らず、地域力は衰退している。ファミリーサポートセンターのお助けさんも実際に活動されている人は、10～12 名しかおらず、今後も高齢化によって存続が危ぶまれている。自治会長も何でも屋のようになっていて、気が休まることもないと聞く。

A委員)

委員の意見から地域の極めて厳しい現実を感じた。既存のものだけをベースに考えるのでは限界に来ている。作り直すような視点を持たないと計画期間の6年間も持たないのではないかと感じる。また、分野の縦割りではなく、狭間を埋めるような計画でなければならないと感じた。

■その他

・事務局より連絡事項

本日の計画案について、8月末まで意見受付。そのほか、今後のスケジュール、委員改選、議事録の送付等について報告。

終了